

買った。そして、網干さんの『スケッチ・淡彩上達コース』に出会い、立川の網干教室に入門した。

私にとっての教室の初日は 1988 年、昭和 63 年 4 月 6 日（水）だった。新入生は 9 人だった。教室の中央に大きな花と花瓶がおかれ、受講生はぎっしりこれを囲んだ。始めに結構長い話があった。19 世紀末の黒の流行の話だった。この後、先輩達は花瓶の花のスケッチに入っていたが、9 人は部屋の隅に集められて、ごく基本の講義を受けた。

この中の一つが、何枚描くかだった。「スケッチ・淡彩」だけなら、毎日 P・6 号で 15 枚は描け、と言われた。教室で使うスケッチ・ブックは 30 枚綴りだったら、2 日に 1 冊である。網干さんは油絵も描いているので、「淡彩」は毎月 12～13 冊だと言う。12 冊としても 360 枚だから、12 ヶ月では何と 4320 枚だ。油絵を別にして毎日 12 枚である。6 号で 12～15 枚なら 3 号では少なくとも 20 枚だろう。いずれにしてもプロのすごさに驚嘆した。

68 年前、2,000 枚描けと言われ怠り、15 年前 4,320 枚描けと言われ怠った。仮に、毎年 4,000 枚を描いて来たとしたら、この 15 年間に何と、60,000 枚描いたことになる。完全にプロフェッショナルになっただろう、と思う。これからだって、描こうと思えば描けないことはない筈だが、それが出来ない。理由については、次回にでも書こうと思う。

(03-6-23)